

日本ハリストス正教会教団・西日本主教教区報

西日本正教

No.147

Winter, 2020

西日本主教教区宗務局

604-0965 京都市中京区柳馬場通二条上る六丁目 283

京都ハリストス正教会内

Email: ocj_kyoto@yahoo.co.jp

電話・FAX (075)231-2453

郵便振替 01030-5-18547



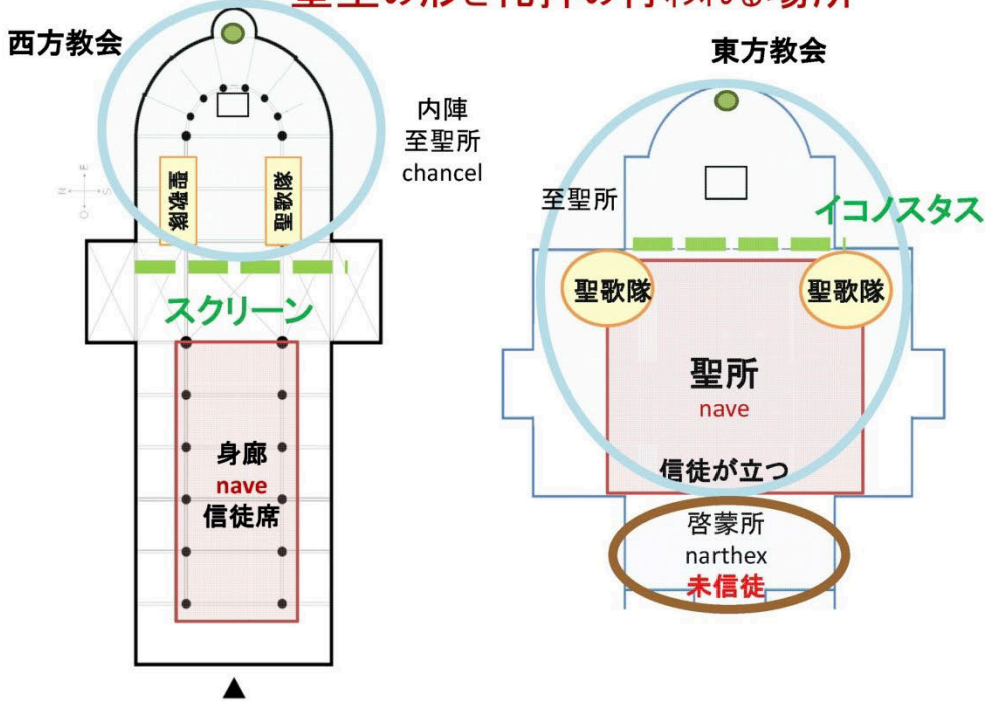
名古屋ハリストス正教会神現聖堂成聖十周年記念(2020年1月13日)

冬季セミナー

オーソドックスとカトリック

堂の美なるを愛する者

聖堂の形と礼拝の行われる場所



二月十一日（火・祝）、大阪教会信徒会館ホールで冬季セミナーが開催されました。講師は正教会聖歌史研究者、大阪教会信徒マリア松島純子姉。西方教会音楽史についてはグリゴリイ水野宏神父の協力を得ました。

キリスト教音楽史において、ほとんど知られていない四世紀から九世紀のビザンティン教会の聖歌発展の歴史を紹介するとともに、中世カトリック教会と正教会の聖堂の形、聖歌隊の配置を比較しながら、その礼拝観の違いを歴史的背景から解説しました。

西方教会の聖堂の形状が縦長で、礼拝の大半が聖職者と聖歌隊などの専門職によってラテン語で行われ、一般信徒はスクリーン（仕切り）によって隔てられた身廊（ネイヴ）から儀式を遠目に見るだけの存在になったのに対し、ハギア・ソフィア大聖堂に範をとるビザンティン十字型の正教会聖堂では、至聖所と聖所（ネイヴ）の距離が近く、聖歌隊もイコノスタスで仕切られた至聖所のすぐ外に立ったために、一般信徒との繋がりが保たれ、同じネイヴ（舟）と呼ばれる信徒席であっても、東西教会で立場が大きく異なるという視点は興味深いものでした。また水野師は西方

で教会音楽からクラシック音楽が発展していった原因として、権力による教会の世俗化をポイントに説明しました。

講演終了後聖堂で、閉会の祈りも兼ねて、大阪教会聖歌隊が復活祭に至る暦から大斎準備週「バビロンの河辺にて」、大斎「願わくは我が祈りは」、復活大祭司頭の「ハリストス死より復活し（第六十七聖詠）」を紹介しました。



参加者は八十七名。そのうち一般からの参加が三十七名と大変多く、とりわけカトリック、聖公会、プロテスタントなど他教派の信徒がめだちました。一般参加者にお願いしたアンケートは、十五名の回答。「どこで知ったか」という質問には教会の周辺のポスターという回答が七人と最も多く、ウェブサイトやSNSが三名、他教派教会へ送付したチラシやその教会の聖職者からの紹介が三名、口コミが二名で、ポスターが意外な健闘を示しています。バザーや日曜講座など地域密着の活動が地元に着実に定着しているといえます。



正教会のどのような面に関心があるかという質問には（複数回答可）、一位は「歴史」九人、以下、「教え」八人、「教会建築」八人、「アイコン」七人、「聖歌」五人、「教会組織」二人、「霊性」二人と続きます。今回のテーマに関心がある人たちの答えですので、その影響の出ている数字でしょう。感想については十四名から回答があり、いずれも好評価で、続きの講演への期待もありました。

同時開催として会場内に大阪教会主催の写真展「真夜中の復活祭」のプレミヤ展示を行いました。撮影は教友の津田郁子さん、昨年の復活祭の臨場感溢れる記録写真三十一点が展示され、正教会の復活祭礼拝の美と力強さを紹介しました。なお、写真展は三月十七日から四月十七日迄、毎週火曜・金曜に公開し、周辺の市民に正教をPRします。

（ゲオルギイ松島記）



オスマン帝国時代の正教会を

訪ねて

サロニキヤ博物館

京都正教会信徒

トルコにはカッパドキアの洞窟教会群や、イスタンブールのカーリエ博物館、アヤソフィヤ博物館など、世界遺産レベルの正教会ゆかりの史跡がたくさんあります。しかし、ここでは私にとって馴染みと愛着の深いオスマン帝国時代の正教会を紹介してみたいと思います。「何故オスマン帝国」「そもそもオスマン帝国って何」というお声もあるかもしれませんが、簡単に言うと、オスマン帝国は一四五三年に正教国家ビザンツ帝国を滅ぼしたイスラーム国家で、正教会では悪者とされがちな国です。しかしこの国のあり方、また、今のトルコの宗教のあり方を見ていくと、多くの発見があり、違った価値観を持つ人々との共存のあり方について考えさせられることがたくさんあります。

まず、「オスマン帝国悪者説」から考えていきたいと思います。正教会の国を滅ぼしたので悪者と考えられるのは自然な流れかもしれませんが、次の絵を見て下さい。



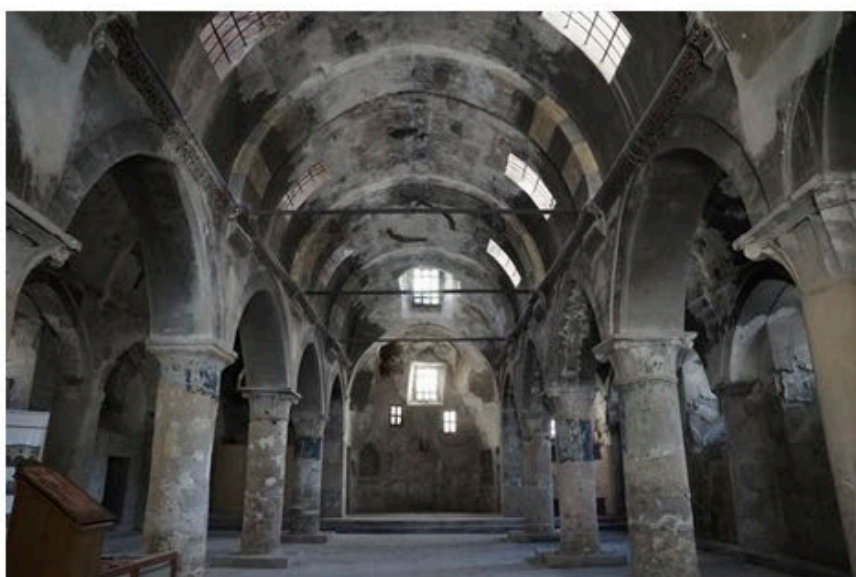
これは、今もコンスタンティノープル総主教庁入口に飾られているオスマン帝国皇帝メフメト二世とコンスタンティノープル総主教ゲンナディオス二世の肖像画です。メフメト二世はビザンツ帝国を滅ぼした皇帝であり、新たな正教会の秩序を作り出した人でもあります。つまり、正教会を弾圧するのではなく、帝国の統治の欠かせない要素として正教会を組み込んでいきました。これには正教会がカトリック教会との対立の中で消極的選択としてオスマン帝国との協力を選んだことも背景に挙げられます。それ以前からオスマン帝国皇族や高官はギリシア人との混血が進んでいましたが、この時代から本格的に正教徒がオスマン帝国の政権の中枢に入り込んでいきます。しかし、それはトルコ人の反発を招くことでもあるので、表向きは「奴隷」という形を取ります。イスラーム世界では奴隷が貴族に代わる特権階級として高い地位に就くことも多く、多くのキリス

ト教徒の有力者が子弟を「奴隷」という名の下に宮廷に送り込むことも多かったようです。オスマン帝国の政権のトップは大宰相ですが、歴代大宰相の半数以上が正教徒出身です。「奴隷」本人はイスラームに改宗しますが、親族は正教徒のままなので、教会の建設や修復にも多額の子算がつき込まれました。オスマン帝国時代にはいくつかの「弾圧」事件が起こりますが、そのうちの多くはオスマン帝国高官となった元正教徒同士の争いによるもので、これらを単純に「イスラームによるキリスト教の弾圧」と捉えてしまうのは危険なことです。しかし欧米やロシアの帝国主義者はオスマン帝国の内紛を意図的に宗教対立に読み替え、それが戦争のきっかけともなりました。オスマン帝国と正教会の協力関係は、非常に政治的で打算的なものです。しかし、オスマン帝国時代の正教会を見てみると、実に荘厳で、帝国最大のミット（宗教共同体）として、また正教会の総本山を国家の威信をかけて守ろうとする姿勢が感じられます。写真は総本山聖グレゴリウス大聖堂、そしてイスタンブル最大の聖堂、聖至聖三者大聖堂で、どちらも非常に高いイコノスタスが特徴です。十九世紀後半のもですが、ドルマバフチェ宮殿などと通じるオスマン・バロック様式の美しい教会です。一八三三年にはハルキ神学校が設立され、この後約百五十年に渡り正教会の教えを守り続けます。教会での典礼言語はギリシア語ですが、メフメト四世時代にはオスマン語訳聖書も作られました。残念ながらオスマン語での典礼は行われませんでした。このような事業がなされたことは注目に値します。



このように、オスマン帝国時代は正教会の暗黒時代ではないはずなのですが、そのようなイメージが形成されていく理由もわかります。一つには、オスマン帝国から独立した、あるいは対立した教会の力が現在トルコ国内の正教会よりも強いことが挙げられます。正教会がオスマン国内で力を持っていたといっても、すべての人がそれに与ったわけではありませんが、不満を持つ人もいました。ギリシアの独立もその代表的なものです。コンスタンティノープル総主教は独立派を異端として破門しましたが、結局ロシアや欧米列強がこれを支援し、独立を果たしたため、ギリシア側に正当性があるように語られることが多いです。しかし、ギリシア独立を支援した国々の領土的な野心や、民族主義の生み出す悲劇を考えると単純に称賛するのは少し思いとどまりたいところでは。また、「オスマン帝国II抑圧者」のイメージは、トルコ共和国との混同によるものもあると思われまます。トルコ共和国はオスマン帝国から独立した国の一つで、最終的にオスマン帝国を滅ぼした国です。それゆえ、オスマン的なものつまり皇室、イスラーム法学者、正教会などを排除あるいは抑圧し、帝都を地方都市に降格しました。二十世紀前半には帝都コンスタンティニエの人口の約四割はキリスト教徒で金融界を支配していましたが、後半にはギリシアとの住民交換が行われ現在では一%ほどになりました。厳格な政教分離のもと、教会やモスクは閉鎖され、公的な場での宗教教育が禁止されました。イスラームに関しては徐々に緩和されてい

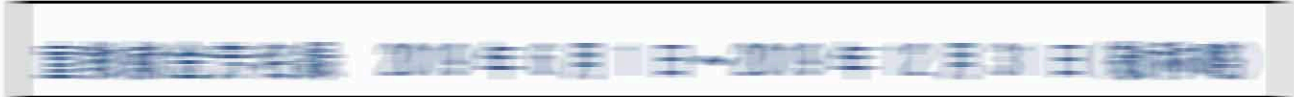
るようですが、オスマン帝国時代の由緒ある正教会の神学校はまだ一つも復活していません。



写真はカッパドキアの聖エイレーネ教会の現在のものです。アフメト一世の勅令により建てられ、かつては毎日聖体礼儀が行われていたそうですが、今はこのような寒々しい状態で放置されています。おそらく、このトルコ共和国における正教会の酷い状況がオスマン帝国と混同されているのではないかと思います。

では、現在トルコ共和国の正教徒が抑圧の中で絶望して生きていくのかというと、そういうわけではありません。トルコは世界でもエキュメニカル運動が盛んな国です。エキュメニカル運動といえば一般的にはキリスト教内の一致運動ですが、トルコの場合、イスラームという圧倒的な多数派との共生が前提となっているので、一致よりも違いを認め合うという面が強いです。数年前にHristianlik

(Christianity)という東方正教会を中心とする書物が出ましたが、三位一体などキリスト教の最大公約数として共有できる部分をまとめたような形のもです。トルコでは、違うということでも争うより、最大公約数を探していきます。宗教が違って、民族が違って、「人である」というところは必ず最大公約数として残ります。現在、トルコの正教会は衰退の中にありますが、イスラームともカトリックとも堅苦しい「対話」などではなく、呼吸をするように自然に共存しています。復活祭や犠牲祭は互いに祝い合うのが当たり前です。復活祭にトルコに居合わせたことはないのですが、SNS上で見ている、非キリスト教徒らしき人々からのPaskalya bayram kutur olsun。(幸せな復活祭でありますように！)というお祝いのメッセージが飛び交っています。世俗主義者とムスリムの多いトルコにあって、多くの人が復活祭とともに喜んでくれることは大きな喜びです。トルコだけでなく、違う宗教や思想の人々が喜びや悲しみを分かち合える世界となれたら、とトルコの人々の温かさを思い出しながら願わずにはいられません。



1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	32	33	34	35
36	37	38	39	40	41	42
43	44	45	46	47	48	49
50	51	52	53	54	55	56
57	58	59	60	61	62	63
64	65	66	67	68	69	70
71	72	73	74	75	76	77
78	79	80	81	82	83	84
85	86	87	88	89	90	91
92	93	94	95	96	97	98
99	100	101	102	103	104	105

教区の活動

名古屋教会神現聖堂成聖十周年

二〇二〇年一月十三日（月祝）、名古屋ハリストス正教会神現聖堂は二〇一〇年一月の成聖から十年目を迎え、記念行事を催しました。この催しには西日本主教区後援行事として大阪教会から前管轄司祭のゲオルギイ松島神父さま、さらに神戸教会からワシリイ杉村神父さま、ニコライ堂からソロモン川島伝教者さまが来会され、半田、豊橋など近隣の教会からも多くの来会者がありました。

十一時から聖堂入口にて大聖水式、引き続き聖堂内に移動して感謝祈禱を行い、その後、集会室での祝賀会となりました。祝賀会では名古屋教会の堂祭で恒例となっている餅つきを行い、参加者はつきたてのお餅に舌鼓をうちました。

参加者は六十七人と盛会でした。なおダニイル府主教座下をご招待していましたが、体調面を考慮して今回は残念ながらご欠席となりました。

困難をともなった聖堂建設に尽力された関係者の方々を改めて記憶するとともに、名古屋教会のさらなる発展を祈願いたします。みなさまにもあつてもご加勢とご協力のほど、お願いいたします。

西日本主教区教区後援行事。

（グリゴリイ伊藤記）



我等互に相愛す可し

「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考へなさい（フィリッピ二二三）」。これを皆が実行できたなら、教会は「ハリストスの体（コリンフ前一二二七）」としての、完全な愛に満ち溢れることでしょう。しかしながら、いつの時代にも人間の様々



な思惑や感情が交錯し、本来あるべき姿とはかけ離れてしまっているのが現実です。

とはいえ、そもそも私たちが完璧な存在ならば、教会に集って祈りを共にする必要はありません。そうではないからこそ、互いのうちにハリストスの臨在を見出し、人それぞれの良さを認め合う姿勢が私たちに求められているわけです。そのようなことを考えていた矢先、名古屋教会での記念行事に接し、僭越ながらこれに近い印象を受けることとなります。

例えば、かねてより動画で聖歌を拝見するに、正直その独特な試みには違和感が拭えませんでした。ところが、今となっては地に足のついた「自分たちの祈り」へと成熟を遂げていました。その力強さたるや、奉神礼の喜びを忘れかけていた私の目頭を、

思わず熱くさせたほどです。そればかりか、ハンデ
イキャップを持つ方を皆で支え合い、共に祈りを捧
げる姿から連想されるのは、信徒の間につまらぬ優
劣などが存在しない証拠。ゆえに、神様が創造され
た兄弟姉妹に尊敬を払える人には、必ず自分の居場
所が見つかるものと確信します。

こうして、餅つき大会やパーティーも含め、主体
的で着飾らない信仰の喜びを実感でき、有意義な教
会訪問となりました。お世話になった方々には感謝
の念に堪えません。「互いに愛し合う（イオアン一
三・三四ほか）」皆様の上に、末永く神様の恩寵が降
ることをお祈りするとともに、近い将来また皆様の
もとでお役に立てる日が与えられることを切に望み
ます。

（東京復活大聖堂教会 ソロモン川島記）



正教会 秋のコンサート

十月二十七日（日）午後二時十五分～三時三十分、
京都の西日本教区センターにおいて、表記コンサ
ートを開催。まず二時十五分、協賛・関西盲導犬協
会の啓蒙活動。盲導犬訓練士がPR犬ヘイゼル号と
共に、現場を意識した実地のシミュレーション、歩
行演習など盲導犬の仕事を紹介。仕事中の盲導犬に
は、基本的に声かけや気を散じるような行為をして
はいけないこと。生まれつきよりも、病気や事故等
で視覚障害者となるひとがいることもお話しされま
した。今回の募金が、盲導犬の育成と仕事を終え引
退した盲導犬の老後生活にすこしでも役立つよう祈
ります。

約一時間のコンサートは、フォークシンガー増田
起也さん。自作の「母親マーチ」「ばあちゃんの歌」
やよく知られているフォークソングを熱唱。みんな
で声を合わせての合唱もあり、楽しいひと時を体験
しました。

皆様、ありがとうございました。出席二十三人。
西日本主教教区主催。



講演会 「記憶、言葉そして祈り」

十月二十七日（日）夕方四時三十分、アナスタ
シア山崎佳代子先生による講演会。山崎先生は著書
『パンと野いちご』勁草書房が宇治市の紫式部文学
賞を受賞。その受賞記念講演です。ちなみに宇治市
の授章式は十一月九日です。

山崎先生は、セルビア在住、ベオグラード大学教
授、日本文学者、作家、詩人として活躍しておられ
ます。講演ではセルビアでの体験談、介入した諸国・
民族主義者らの狡猾なマスコミ・メディア操作のた
め、ユーゴスラビア解体による民族対立が煽られ、
その中であつていかに宗教の異なる人々が家族的な
友情を大切に生活していたのかを、じっくり講演さ
れました。質疑応答も充実、出席五十一人。
会のあとの聖堂拝観に八人の市民の参加。
京都正教会主催。



同志社大 清瀬ゼミ 勉強会

十一月二日（土）午後二時～四時、京都聖堂において、同志社大の学生の表記勉強会。まず清瀬先生が簡略に正教会の歴史、聖堂建築、教会美術の概略を講話。そのあと及川神父が聖像（イコン）の歴史と神学的意義について講話。自印聖像、最初の聖像画家といわれる聖使徒・福音者ルカ、聖像破壊（イコノクラスム）、京都聖堂の聖像の特色などを神父が講話、そのあと約四十分質疑応答。出席五十人。



講演会「魂の人アウグスティヌス」

十一月四日（月祝）午後一時～三時、片柳榮一先生による講演会。片柳先生は京都大学名誉教授、アウグスティヌス研究の第一人者として知られ、今回は「私の最内奥よりさらに内に在す神」を副題に話しされました。詳細な資料を手に、少年期に入信していたマニ教のこと、若き日の結婚と離別、母親の影響、ミラノの主教聖アンブロシウスによるキリスト教入信、キリスト教の神学研究の日々などについて丁寧に講演されました。

少年期に大きな感化を受けたマニ教的二元論を乗り越えて、キリスト教の正統信仰を究めていく中で、アウグスティヌスの信仰と神学が確立されていたことなどをくわしくお話しされました。内容豊かな講演ありがとうございました。出席四十七人。

会のあとの聖堂拝観、松島神父様が「正教会」について講話、二十六人の市民の参加がありました。

西日本主教区教区主催。

（以上、パウエル及川記）

西日本教区センター 外壁修復工事を予定

二月下旬、京都の教区センター東側外壁タイル、やや広範囲の浮き上がり、剥離が確認された。二月二三日午前、創真建設の伊原建築士が視察し、さっそく修復工事の工程を組むことになった。



松山ロシア人墓地祈祷報告



令和元年十一月四日(月)、松山にありますロシア人墓地においてパニヒダ祈祷が行われました。十八名の方が出席して下さいました。当日は、少し冷たい秋風が強く吹いておりましたが、晴天に恵まれ、穏やかな日差しの中、午前十一時より祈祷が開始され、ロシア兵捕虜九十八名の方々の永遠の記憶がなされ、実りある穏やかな祈りの時が与えられました。参拝者はナフアナイル小川神父様とマトシカ、徳島教会からは赤澤兄、高松教会からは大藪兄、墓地保存会の菅田会長、生徒代表の方、地元のボランティアの方々、計十八人の方がご出席くださいました。徳島教会からは百合のお花が墓前に供えられました。祈祷の最後にナフアナイル小川神父様より短いご挨拶

がありました。ナフアナイル小川卓神父様は現在病氣療養中の為、及ばずながら私・ワシリイ杉村が司務させて頂きました。墓地は大変綺麗に清掃されておりました。

松山・ロシア兵墓地保存会の菅田会長をはじめ、日々墓地の清掃をして下さっている勝山中学校の先生方と生徒の皆様、いつも本当に有難うございます。病氣療養中のナフアナイル小川神父様に神様のご恩寵と癒しが豊かに与えられますよう皆さまもご加

(ワシリイ杉村記)

豊橋正教会での奉事と行事

主の降誕祭・祝賀会

十二月二十九日(日)豊橋聖使徒マトフェイ聖堂において、主の降誕祭聖体礼儀と祝賀会を開催。この日は朝から洗礼、祭日聖体礼儀につき神僕イオアン釜谷幹雄長輔祭記憶のパニヒダ、降誕祭祝賀会とめいっばいのスケジュールでした。

祈祷には名古屋のグリゴリー伊藤慶郎神父様と伊藤藤マトシカ、名古屋や半田の信徒に加え、ロシア等の外国人信徒のご家族、秋田のセラフイーマ釜谷マトシカから約五十人が参拝され、とてもにぎやかな降誕祭となりました。

祝賀会の後は、司祭二人が出席しての執事会も開催されました。豊橋聖堂は、国指定の重要文化財。聖堂修復工事へ向けて協議が重ねられています。執事会では、伊藤執事から、これまでの経緯と修復の計画案、必要資金についての説明がありました。教団からの貸付・融資についても話し合わせ、年をまたいで一月十六日の協議時にも再確認され、及川神父が教団に融資をお願いすることに合意しました。満田稔執事長が、豊橋教会は信徒一同一体となり相和して活動を推進していくことをお話しされ、執事会をしめくくりました。いっしょにがんばりましょう。

おもてなしくださった豊橋の信徒の皆様へ深く感謝申し上げます。



主の洗礼祭と大聖水式

一月十八日(土)豊橋聖堂において、主の洗礼(神現)祭聖体礼儀と大聖水式、参拝者約二十五人。とても荘厳な祈りで、十字架接吻後、成聖された聖水を分かち合いました。そのあと信徒会館で婦人会総会を開催。二班のメンバーから、婦人会長・三井光子姉、会計・三井稚枝姉、役員・高沢花子姉・氏原信子姉・満田佳江子姉が選任されました。皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。

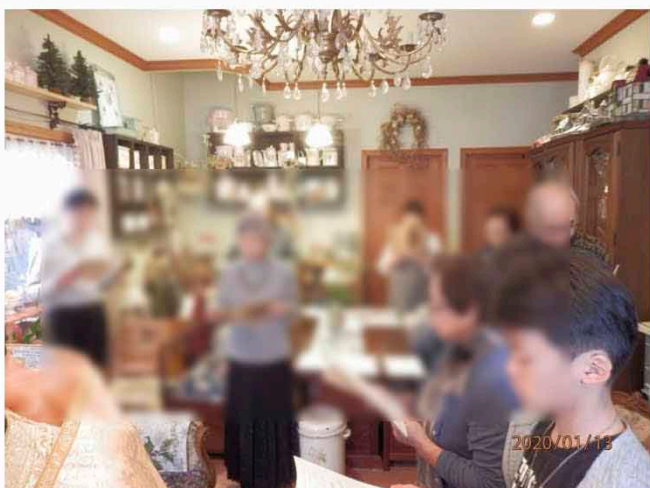
(パウエル及川記)



和歌山祈禱集會

一月十三日(月祝)和歌山正教会の主の降誕祭と祝賀会が行われました。今回は前田兄宅が会場でした。和歌山ではすでに九月に今福霊園教会墓地祈禱、十一月に三木姉宅で代式祈禱と集會が開催されています。今福にある多数の教会墓碑を見ますと、第二次世界大戦前、往事の和歌山正教会の隆盛が偲ばれます。皆様にいろいろ教えていただきながら、いつしよにがんばりたいと思います。深い感謝をこめて

(パウエル及川記)



教区 人事

十月十日付

長司祭グリゴリー小川公師 休職を命ず
徳島管区の管轄を解く。

同日付

長司祭パウエル及川信師 徳島管区の管轄司祭を命ず。

同日付

司祭ナフアイル小川卓師 徳島管区、副司祭を命ず。

十月十七日付

司祭ナフアイル小川卓師 病氣療養を命ず。

(健康回復までの期間中の聖務執行を控えるようにとの内容)

豊橋管区について

グリゴリー伊藤師(名古屋)と局長とが聖務を執行します。

徳島管区について

健康回復の状況を鑑みながら、ゲオルギイ松島師(大阪)とワシリイ杉村師(神戸)、局長が、小川卓師と協議・調整しつつ聖務を執行します。

新刊本ご案内

春のさわやかな日にこの一冊

『聖書人物伝』が西日本主教教区教務部より出版されました。

以前より教区の司祭会議では、初心者向けの入門書の作成について話し合ってきましたが、このたび、ようやく皆様に一冊、お披露目できることになりました。

「読んでためになる」聖書入門書です。ご依頼は下記まで。

及川信『聖書人物伝』 1冊 1500円（送料別）



西日本主教教区 宗務局 京都ハリストス正教会内
〒604-0965 京都市中京区柳馬場通二条上る六丁目 283
Tel. 075-231-2453

《西日本主教教区の本》

『家庭祈祷集』 500円

『聖語拾穂』 500円

列聖四十年記念誌『使徒聖ニコライの翻訳事業』 500円

G・クロンク、松島雄一訳『聖書のメッセージ』 1300円

トマス・ホプコ、水口優明・松島雄一訳『聖書概論 教会史』 1300円

トマス・ホプコ、小野貞治訳『奉神礼』 1300円

カリストス・ウェア、水口優明・松島雄一訳

『私たちはどのように救われるのか』 1300円

ガードナー、松島純子訳『ロシア正教会の聖歌』 1300円

及川信『神父になったサムライ』 1000円

ほか「講演録」など多数頒布

以下も好評発売中 書店、ネットなどでお求めいただけます。

松島雄一『神の狂おしいほどの愛』（ヨベル 2019年）

松島神父さまのメッセージ集です。正教会ならではの聖書理解。

ジュゼッペ三木一、佐藤弥生訳、松島雄一監修

『アベルのところで命を祝う』（ヨベル 2019年）

『師父たちの食卓で』の続編。創世記第四章を聖師父の解釈に基づいて読む。